

トーマス・マンのオカルト体験

田 中 暁

トーマス・マン『魔の山』の末尾近く「奇怪至極なこと」(Fragwürdigstes)と題された節があり、そこでは霊の現れる心霊術の実験の様子が描かれている。テーブルの中央に伏せて置かれたワイングラスがひとりでに動きまわったり、床の上にあるハンカチが宙に舞い上がり、紙屑籠が誰も手を触れないのに持ち上げられて数秒空中にとどまり、或はまた卓上用の呼び鈴が勝手に鳴りはじめたりして、遂には死者の霊を呼び出す場面まで登場する。いかに「平地」を遠くはなれた「魔の山」の上の錬金術的世界のこととはいえ、このような現実ばなれのした話は、リアリスト、トーマス・マンの作品としては、いささか奇異の念を与えざるを得ないのであるが、実はこれにはマン自身の体験の裏付けがあった。即ち、『魔の山』執筆中の1922年12月から翌年1月にかけて三度ばかり、マンはこの種の心霊実験に立ち会っていたのである。

ミュンヘンはカロリーネン広場のすぐ近くに邸宅を構えるアルベルト・フォン・シュレンク=ノツィング男爵がその実験の主催者であった。彼はもともと開業医で、神経病の専門医、性病理学者であったが、催眠術、夢遊症の研究から遂にはオカルトの研究をするに至った。彼の著書『物質化現象』は世間にたいへんなスキャンダルを巻きおこし、学界からの厳しい批判を被ったのであるが、そんなことはお構いなしに彼は自宅で実験を続けた。そうした実験のうち1922年12月20日、1923年1月6日、同24日の三回の実験にマンが同席したのである。マンはこのそれぞれについて、実験のあった翌日フォン・シュレンク=ノツィングに宛てて書簡をしたため、実験の内容について報告している(その書簡が「オカルトの会についての三つの報告」として全集XIII巻33-49頁に収められている)。またその書簡による報告をまとめる形で「オカルト体験」と題するエッセイを書き、これを各地で講演している(X, 135-171)。ここではまずマンのオカルト体験を書簡およびエッセイを手懸かりとして紹介し、次に『魔の山』を

はじめとしてマンの諸作品の中にこのオカルト体験がどのように取り入れられているかを考察し、更にはマンのオカルト現象に対する立場にも論及したい。

1. トーマス・マンのオカルト体験

心霊現象とは霊媒と呼ばれる特異能力者が夢遊状態に入って引き起こす超常現象であり、通常の心理学的知見ではこれを解明することはできない。霊媒を用いて死者の霊と交流する会合を交霊会 (Séance) という。遠方の出来事を直接感知する透視 (千里眼) や他人のこころを読みとる思念伝達、更に物理的現象としては、接触せずに物体を動かす隔動現象、空中に浮上させる浮揚、他の物体を突き抜けたり消失させたり出現させる物体貫通、幽霊を出す物質化現象などが報告されている。これらの現象には霊媒の身体から流出する半物質が関連していると考えられている。ポルター・ガイスト (家の中で騒ぐ霊、家の精)、念写、テレビ番組でおなじみのスプーン曲げ等もその一種である。²⁾

さて、トーマス・マンが出席した会合の場合、ヴィリイという二十歳ぐらいの男性が霊媒である。マンはシュレンク=ノツィング邸の応接間で他の参会者たちに紹介されたあと、ヴィリイとも二三、言葉を交した。一つには自分がヴィリイ青年に敵対する者ではないし、悪意をもって監視に来たのではないということをはっきりさせたかったし、また一つにはヴィリイという若者がどういう人物なのか少しでも知っておきたかったからである。若者は「明らかにかなり質素な身分の出で、南ドイツ・オーストリア方言を話す、上品な好人物であるが、やたら好意的にして口数多く愛想よくして好感をもたれたいと望んでいる様子はなかった」(XIII, 34)。参会者たちから一人離れていて、質問に答えるときも言葉少なで、緊張気味、いわばアガッている状態であった。

マンは隣の実験室の中を見回し、この部屋の一隅がカーテンで仕切られており、そのうしろが小部屋になっている、その小部屋の中も検分したが、何も問題ないようであった。それからヴィリイが身につけた黒いトリコットとその上に羽織った発光物質のついた(暗闇でも見えるようにするため)ナイトガウンも調べたが、これも何の仕掛けもなかった。

参会者はカーテンで仕切られた小部屋の前に四分の三円の形で並べられた椅子に座り、一番はしに霊媒が座る。霊媒に向いあって二人のコントロー

ラーが参会者に背を向けた格好で座っている。コントローラーの一人は霊媒の足、すね、膝を自分の脚の間に挟みこみ、手首をしっかりと握り、もう一人が霊媒の母指球をつかむ。天井灯に赤と黒の被いがかけられ、それと卓上スタンドも赤い色で照明は弱く赤みがかかった色にしてあるが、霊媒の姿はナイトガウンに光の縞がとりつけられていたおかげで実験の間ずっと見えていた。ナイトガウンのすその部分には発光性の針がさしてあった。

オルゴールのスイッチが入れられ、皆はおしゃべりをしている、緊張していまかいまかと待ち受けるのではなく、その場の雰囲気はくつろいでいた方がよいからである。照明がおとされてから数分して、霊媒がトランス（催眠状態）に入ったとコントローラーが告げた。上体を前に突き出すような動きをつづけ、それから突然短く激しい痙攣的な動きをして、このトランスは始まった。ヴィリィの自我が分裂して二人の人格（人物）が現れる。一人は男性のエルヴィン、もう一人は女性でミンナという名である。エルヴィンは荒っぽい動きで現れたが、やがて退き、やさしい態度のミンナに代わるのであるが、これも妨害に遭ってスムーズに現れることができない。参会者たちは席を変えてみたりする。霊媒は格闘しながら任務を遂行している、突き出すように体をあちこちに投げ出し、小声で話し、喘ぎ呻く、これは出産を想わせる行為であるとマンは述べている。一時間以上経過したが、何事も起こらなかったので休憩となった。

実験が再開されても何の変化も見られない。ただし、小部屋を仕切るカーテンの前の床の上にあった二つの光の輪が、はじめは全体が見えていたのが、三分の二ほどがカーテンの下に隠れてしまい、しばらくするとまた全体が見えるようになった。カーテンが前に出てきたか、あるいは光の輪の方がカーテンの下に潜り込んだかのどちらかしが考えられない。その他別に成果もなく、実験開始後三時間を経過し、本日は打ち切りとなったが、その前に最後の促しが試みられたとき、ついに現象が起こった。

「小机のそばの床の上にあったハンカチがそこから持ち上げられ、すばやくしっかりした力強い動きで電灯のかなり明るい輝きの中へ昇ってゆき、そこで二、三秒動かなかった。その間、押し付けるような揺すぶるような変形がハンカチに加えられ、そのあとハンカチは床の上に戻った」(XIII, 37f.)。

ハンカチは空（から）のまま舞い上がったのではなく、ハンカチの中には支えのようなものが入っていて、それにより内部から操作されていた。そ

れは関節状の隆起のある捕握器官で、人間の手よりも著しく痩せており、鉤爪のように見えた。ハンカチの浮揚は三度起こった。そのあと床の上のハンカチを霊媒の指示でどけると、その場所に何か名状しがたいものが現れた。形のない五十センチほどのもので、おそらく先程の捕握器官であろうが、独特の螢光を有してして輪郭がぼやけており、じっと観察したにもかかわらず、あとになっては形がはっきり思い出せない。次は卓上呼び鈴が鳴らされ、参会者の一人の座っている椅子の下に荒っぽく投げつけられた。その次には光の輪が、光の紐を垂らして机まで昇ってゆき、ひっかくような音をたてながら机の端を動き回った。

そのあとは霊の力は弱くなり、目立った行動もなく、霊媒は疲れ果て、終了を希望した。白色光がともされる。ヴィリィはなおもしばらくの間眠りこけ、コントローラーの一人の腕の上にもたれかかっていた。マンがヴィリィの肩をたたき、満足の意を表明すると、彼は寝ぼけ眼で人のよさそうなメラニコリックな微笑を浮かべて黙ってマンの方を見上げた、「それは詐欺師いかさましの顔つきではありませんでした」(XIII, 39)。

実際、ハンカチが浮揚し、呼び鈴が鳴らされ投げつけられたとき、そこには誰もいなかったのである。ヴィリィができるはずはない、彼は手足をおさえられ、しかも催眠術にかかったように眠り込んでいたのであるから。何がそうしたのかわからないが、自分は他の人たちと一緒に、大きく見開いた両の目ではっきりと見たのであると、マンは証言している。

第二回目の会合のときはマンが霊媒のコントローラーの役をしている。しかしマンにはコントローラーとしての素質はあまりなかったようである。何の変化もないまま、休憩をはさんでまたかなりの時間が経ったとき、コントローラーは交替となった。

さて今回も第一回目のときと同じような現象が起こった。ハンカチの浮揚、オルゴールのスイッチが入れられ、それから今回は紙屑籠が持ち上げられ、かなり長い間水平の姿勢で赤い光の中で高く上げられ、皆が喝采してどよめく中を下に降ろされた。

次の対象はタイプライターである。タイプライターが誰も手を触れないのに作動し文字を打ったのである。ヴィリィの位置からして、ヴィリィがやったとは考えられず、合理的には説明の仕様がな。また、マンの顔めがけて小さな光の輪が飛んできたりもした。

それから霊媒が夢遊状態で透視能力を発揮した、ヴィリィが目を閉じ、頭を前に垂らすか後ろに倒すか、あるいはコントローラーの腕か膝の上においていて見えないはずなのに、はじめハンカチの代わりに床の上に置いてあったガーゼをハンカチに代えてくれるように要求したのである。

マンは第二の報告の末尾でもう一度コントローラーの役をしたい旨伝えられているが、第三回目の実験でそれが実現している。今回もいつものようにまず最初はハンカチの浮揚が起こり、紙屑籠が持ち上げられ、空中に支えられ、それから落とされた。呼び鈴も鳴らされた。

今回新しかったのはタンバリンのオカルト操作である。タンバリンが持ち上げられ、空中で強く振られた。それから又、小机も持ち上げられ、大きな音とともに床の上に戻された。そこから推測するに、目に見えぬ捕握器官はかなり発達したもので、普通の人間の手と本質的に違ってはいないのではないかとマンは書いている。それはよく訓練されていて、人間の目を嫌がるのは自分の姿が人間の手とは程遠く、醜い鉤爪のような形だからであろうというのがマンの推測である。

以上は、マンが出席した三回の心靈実験の様子をその主催者シュレンク男爵宛の書簡によって再現したものである。エッセイ『オカルト体験』の中の心靈実験の叙述の部分は上の三つの報告をまとめたものであるのでここに繰り返し取り上げることはしない。

さて我々の興味を引くのは、マンが自ら体験したオカルト現象をどのように思っていたかということである。これは実は微妙な問題なのであるが、一口に言えば、マンはオカルト現象を認めているが、いや認めざるを得なかったのであるが、それに呪縛されることはなかったということである。

マンは実験の様子を紹介したあとで、その時の内的状況を「理性が一方で不可能だとして否定したいと思っていることを、その理性自身が認知するように命じているという、まさにそういう状況」(X, 166)と説明している。あり得ないことがしかし現実に起こったのであり、そのことは認めざるを得ない。マンは実験にべてんも手品の惑わしも入りこむ余地のなかったことを証言することを自分の義務とまで思っている。

そもそもオカルティズムに対する態度には、政治の世界同様、右派と左派があることをマンは指摘している³⁾。即ち、右派とはテレパシー、正夢、

千里眼といった、合理的には説明できないが実際には起こっている現象を頑なに否定する保守的態度であり、左派とは理性と科学に対する敵意から、これを狂言的、無批判的に信じてしまう、マンの言い方に従えば、急進的革命的態度であるが、実際にはこの両極端のあいだに多くの過渡的段階が存在しているのである。マン自身は自分をかなり左派だとしている。

マンによれば心靈実験で問題となっているのは、有機的生命のオカルト的幻術 (Gaukelei) [マンは Realität と Trug の概念がこの語の中で混じりあっているとして、Betrug, Taschenspiel, Illusionierung 等とこの語を区別している] であり、本能的で深くもつれている観念複合体なのであるが、この観念複合体は原初のかつ複雑で、あまり品位のあるものではないから、美的で誇らかな感性の持ち主には不快感を与えるかも知れないが、疑いなく現実に起こっているのものであって、これを否定するのは非理性的な強情である (X, 167, XIII, 44)。そうしてマンは専門用語を用いて、念動現象、隔動現象 (telekinetische Phänomene, Erscheinungen der Fernbewegung) と説明している。

元来マンには人間理性で説明しきれない非合理的なものへの志向があることは周知のとおりであるが、ここでもマンはクロード・ベルナルの例を引きながら、偉大な予言者精神というものは神秘との内面的接触を決して失ってはいないものだ、それにひきかえ平均的人間は、何でも説明できるのだという科学のうぬぼれを信用してしまい、自然や生について科学もっている正確な知識がいかにか不完全なものであるかということをおぼえてしまっていると批判する。

非合理的なものへの傾向が心靈現象への理解をよりのたやすいものにしたことは確かであろう。『オカルト体験』執筆後の書簡にも「いわゆる隔動現象、その真正さに異議を唱えることは私には不可能と思われます」(1923. 3.21)⁴⁾とあり、「オカルト体験」を指して「ユーモアをまじえてではあるが、肯定的に隔動現象について報告した論文」(1924. 7.23)と性格づけている。そうして第三の報告の末尾は、この報告が実験の主催者シュレンク男爵に宛てて書かれたという点は差し引いて考えねばならぬとしても、「現象の現実性とオカルトの真実性は、私にはもはや疑いの余地のないものであるという断言をもって報告を終わりたいと思います。この我々の時代に、自分の感覚を信用する勇気やとらわれのない態度を有っていた人々に対し、後世の科学は感謝するであろうと、私は確信しておりま

す」(XIII, 47f.)と結ばれているのである。

これで見るとマンはオカルティストの仲間になっているように見える、あからさまに言えばシュレンク博士の術中に陥っているように思われる。事実、マン自身が「私はオカルティストの手中におちたのだ」(X,136)と告白しているのである。だが、裏面より見るならば、真に手中におちたものならば、手中におちたと自覚することもあるまい。果たしてマンはすぐに「ただしスピリティストの手中におちたというわけではない」と続けて、ここでオカルティズム (Okkultismus) と心霊主義 (Spiritismus, 交霊術) とをはっきりと区別している。オカルティズムは自然の探究であり、自然にはデモニーッシュな要素があるからこれを研究するには、認識理論的、超越的思弁的形而上学がもっているような品位を保持していることはできないが、しかしオカルティズムは経験的実験的形而上学なのである。この点が心霊主義と異なる。心霊主義は幽霊、亡霊の類を信ずることであり、こうなるともはや学問的であるとは言えない。してみると、マンは、心霊そのものは認めるが、その心霊に対する対応の仕方が、心霊主義者とは異なるというのである。心霊主義者は心霊に没頭して、現実生活の常軌を逸するに至る。マンは心霊の超自然的な能力を認めてもそれに対してあくまで文学的昇華の立場を失うまいとする。そのためには心霊を認めても心霊に陶醉没入することは許されない、そこにマン一流のイロニーの立場があるのである。

マンの態度は、後に彼自身回想しているように、「不快感をともなった肯定的態度」であった、「このような事を信ずるということは、このような事を真面目に受けとるとか、そういう事がまともなことだと思いうことではない」のである (1951. 1.10)。つまり「信じないというわけではないが、軽視する」態度である (1947.11. 7)。従って彼はこの実験の問題点を指摘することも忘れない。まず、実験の雰囲気には厳肅なところはなく、アコーディオンとオルゴール音楽と霊媒へ向けられる激励の呼びかけは、救世軍の派手な宣伝方法を思い起こさせるもので、悪趣味で精神的不信をおこさせるものであったとする。また、実験の指導者の制止もきかずに、霊がオルゴールを倒し、投げ落としたことによつて、この力はそのなすがままにさせておくと、ときとして乱暴狼藉、思い上がった風俗壊乱の傾向があるから、この力がむら気をおこして常軌を逸してしまわないようにしておくには、絶えず優しくまた厳しく導いてやる必要があると警戒

している。

オカルトに対する微妙な気持ちはエッセイの末尾にもよく現れている。そこでマンは、あと二度か三度シュレンクのところへ出かけてそれ以上は行くまいと言い、その少し先では、あと二、三度と言ったがあと一度だけにしよう、一回きりだ、その後は絶対に行くまいと言いかえている。

「もう一度だけハンカチが私の目の前で赤い光の中に昇ってゆくのを
見よう。あれは私の血を沸きたたせた、私はあれを忘れることはできない、もう一度私は首を伸ばして、不合理に胃の神経を逆なでされて、あの起こり得ないことを見てみたい、しかしそれはやはり——起こったのだ」(X, 171)。

マンは興味はあった、しかし警戒もしていたのである。「イロニーッシュなドイツ人」トーマス・マンの面目はここでも躍如としている。だがまさにこの態度が「両方の側のひんしゆくをかった」のである。「オカルト現象を信じている人にとってはこの論文（『オカルト体験』）はあまりに懐疑的でこっけいなものでしたし、信じていない人にとってはあまりに迷信的なものでした」(1950. 9. 3)。ここにイロニーの宿命はあるであろう。両方を包括しようとする中間的立場は、その立場を真に徹底しない限りは、どっちつかずの立場に終わる危険があるのである。

2. ハンス・カストルプのオカルト体験——「魔の山」

『魔の山』第七章「奇怪至極なこと」の節において、マン自身の体験したのと同じようなオカルト現象が広範囲に詳細に記述されている。ここで我々の関心事はその記述の内容よりも、その記述の仕方において、マンのオカルト現象に対する真意をつかむことにある。ところがそれが実に微妙な問題であって一義的に明瞭ではない、恐らく読む人によって解釈の相違を生ずるであろう。さてハンス・カストルプが体験する心靈実験では霊媒はエレン・プラント（愛称エリー）という十九歳の女性になっている。カストルプはまずクレーフェルトの部屋で行われた集まりに出席して、霊の出現を体験するが、それを聞いたセテムブリーニがエリーのことを「悪賢い詐欺師^{いかさまし}」と決めつけるのは、彼としては当然のことであろう。カストルプにはしかしながらいささかの余裕がある。彼は「肩をすくめて」次のような考えを述べる。現実（Wirklichkeit）とは何かということははっきり説明されてはいないし、従ってごまかし（Betrug）とは何かということも

同様にはっきりしない、おそらく現実とごまかしの間にはいくつかの移行段階があるのであり、言葉も評価もない自然界の内部には實在性の度合がいくつかあって、その度合は道徳的色彩をもった決定を免れるものである。「生命の神秘というものとは文字どおり底無しのものであって、従って、ときとしてそこから幻術が生じたとしても何の不思議があろうか」(III, 926)。

セテムブリーニは弟子を適当に叱って、そういうぞっとするような会にはもう二度と参加しないという約束のようなことまでさせた。それに続くセテムブリーニの言葉はいかにも合理主義的フマニストらしいものである。明晰で人間らしい思考を信頼して、たがのはずれた脳と精神の泥沼を嫌悪せよ、ごまかしと現実を区別する倫理的勇気が瓦解するところ、生そのもの、判断、価値改善の行為も終わってしまう、人間は万物の尺度なり、善と悪、真実と虚偽の仮象を認識判定する人間の権利は手離すことのできないものである。

さて実験の主権者クロコフスキーは霊媒エリーを使って地下の書齋兼診察室で心靈実験を行っていたのであるが、そこで起こったことが、ハンカチが持ち上げられたり、紙屑籠が宙に浮いたり、卓上呼び鈴が鳴らされたりと、マン自身がシュレンク=ノツィングの邸宅で目のあたりにした現象が下敷きとされているのである。そうしてこの現象を小説ではクロコフスキーが、念動現象、即ち隔動現象だと説明し、「物質化」と呼ばれる領域に分類する。潜在意識の観念複合体の客観的なものへの生命心理的投影がこの物質化の意味である。自然は観念形象化の能力を有っているのであって、それによって観念が物質において一時的に現実性を帯びる、言い換えれば、客観化された潜在観念、これが物質化の現象である。このように霊媒の主観が現実へ反映するということは一応学問的に取り扱ひ得るのであるが、クロコフスキーはさらに一步を進めて、外部にある自我、あの世の自我、わかりやすく言えば死者の霊が再び物質の形をとって自分を呼んでいる人々の前に姿を見せること、交霊術が可能であるというのである。つまり幽霊の出現であって、カストルプもエリーのコントローラーとなって実験し、長い時間と陣痛にも似たエリーの苦痛の経験の結果、ついにヨアーヒムがカストルプに現れたというのである。カストルプは「許してくれ」と心の中でつぶやき、涙があふれ、何も見えなくなった。クロコフスキーが「話しかけてみなさい」と言うが、カストルプはそれには従わず、スイッ

チをひねって煌々と明かりをつけ、その実験の部屋から出て行った。

以上は実験の筋書きをごく簡単に紹介したものであって、これによってマンの真意を推測する由もないが、ヨアーヒムの姿がカストルブの前に現れたのであるから、クロコフスキーの所説の真理は一応これを認めざるを得ないわけである。この限りマンはセテムブリーニの如き単なる合理主義者でないことは確かである。しからばマンはこのようなオカルト的な真理を欣然として認めたかという、決してそうではあるまい。クロコフスキーの研究の対象は潜在意識 (Unterbewußtsein) の領域であったが、マンはこの領域は「言葉本来の意味において『潜在的 (okkult)』であるが、もっと狭い意味で『神秘的 (okkult)』でもあることはすぐに明らかになる」(III, 909) と言う。前述のように、マンは潜在的なものが顕在化することは学問的に取り扱い得るが、あの世の霊をこの世に呼び戻すというような交霊術は学問の領域を一步踏み出るものと考えた、故に「不確かな曖昧な性格を帯びてくる」(III, 928) と言うのである。してみるとマンが「オカルト体験」において「自分はオカルティストの手中におちた」と言いながら、「自分は心靈主義者ではない」としたのは、このオカルトの二つの意義に相応するように思われる。マンは深層心理学の解く潜在意識の説には深く共鳴するものであり、それが一步を進めたオカルト現象にも関心を抱くのであるが、いわゆる交霊術の如き神秘的心靈主義とは距離を保とうとした。その距離感がイロニーとして現れたのである。

事実、この節は「奇怪至極なこと」というタイトルから始まって、その実験室の雰囲気もわざわざ猥雑に描かれている。地下の実験室へ降りていったときのカストルブの気分は、以前ハンプルクはザンクト・パウリの娼家を訪ねたときの気分似たものであったとされる。霊媒エリーは「自分の服は着てなくて、白いクレープのナイトガウンのような一種の交霊会用の衣裳をまとい、ウエストのところを飾り紐の帯でしばり、細い腕を露わにしていた。乙女らしい胸の線が柔らかくそのままに衣裳に現れていたので、彼女は下にはほとんど何もつけていないようであった」(III, 934)。部屋は床を赤い絨毯が覆っていて、天井からは赤のヴェールの上にさらに黒のヴェールをかぶせた電球が下がっている。小机の上にはやはり赤い覆いのしてあるスタンドがのせてある。白色光を消した赤みを帯びた暗がり、カストルブはかつてレントゲン室の暗闇の中で「神妙に心を落ち着けてその闇で昼間の眼を洗った」(III, 936) ことを思い出す。あときカス

トルプははじめてレントゲン検査を受けたのであった。昼間の眼では何も見えないので、明るい昼をその陽気な像もろとも心からぬぐいさるようには、まず眼を暗闇で洗わなければなりませんね」(III, 303)と応じたのであった。こうして彼はヨアーヒムの骸骨を見、それから特に頼んで自分自身の手を透視したのであった。これはいわば自分の墓場を覗きこんだのであり、このときカストルプは自分がいつか死ぬということをはじめて知ったのである。そのカストルプに向かってベーレンスは言った「幽霊みたいでしょう、どうです。そう、たしかに幽霊の気味があることは明白ですな」(III, 307)。その幽霊がいまやクロコフスキーの実験室で本当に現れようとしているのである。エリーの苦しみは陣痛のそれを想わせるものであるが、その様子をマンは「これはけしからぬと言うよりほかはなかった」(III, 940)と伝えている。赤い光に照らされたにぎやかな産室、さらさらしたガウンを着て腕を露わにしている少女のような産婦、蓄音機から絶えず鳴り響いている陽気な音楽、半円形に座った人々が指示に従って続けているわざとらしいおしゃべり、苦闘する霊媒を陽気に励ます呼び掛けの声等「赤味がかかった暗闇の中は騒々しくて俗悪」であり、「神秘さ」も「厳肅さ」も全くなかった(III, 941)。

語り手の叙述はクロコフスキーその人に対しても決して好感を示すことをしない。

「どっしりと自信にみちた微笑をうかべ、快活に信頼をよせてくれるように促しながら、彼は実験の成果を目指していた。ずんぐり肥ったこの人物は、泥沼のようないかかわしい反人間的領域はお手のもので、従ってこの方面に対して尻込みしたり疑いをいだいたりする者にとっても、うってつけの指導者であった」(III, 929)。

これこそイロニーではないか。要するにマンは、オカルト現象の実験を、実に詳細に描くことによって異常な関心を示しつつ、それに没入しないで、それを客観的に描写するというマン一流の手法を堅持しているのである。

さてクロコフスキーの「物質化」であるが、シュレンク博士が、1914年に「物質化現象、霊媒テレバシー研究への寄与」を発表しているのであるから、クロコフスキーはシュレンク博士をモデルにしているであろう。してみるとマンはシュレンク博士の呪縛から、文学的イロニーによって、巧妙に或は辛うじて逃避していることになる。⁵¹

ここで「奇怪至極なこと」の節が「魔の山」において置かれている位置について一言しておきたい。この節は最終の第七章におさめられているが、この章の終わりの五節は「大いなる鈍感」「溢れる妙楽」「奇怪至極なこと」「大いなるいらだち」及び「霹靂」となっており、「霹靂」は第一次大戦の勃発であり、その砲煙弾雨の中に消え行くカストルプの姿をもって「魔の山」は終わるのである。それに先立つ四つの節は、いずれもサナトリウムを包む異常な雰囲気をそれぞれの角度から描いている。

「大いなる鈍感」とは、カストルプおよびサナトリウム全体が陥っている行き詰まりの状態、いわば「死んだ生活」(III, 872)である。退屈のぎに写真や切手の蒐集をしたり、円の面積を正確に求めることに病的な熱心さを示したり、古新聞の回収によって結核療養所の財源や不遇の英才の教育資金を捻出する計算をしたり、或はトランプ占いに夢中になるなど、まさに「大いなる鈍感」と呼べるべきデーモンがほくそ笑むのを感じて、カストルプは心中慄然とするのである。

「溢れる妙楽」の節については簡単に言及することはできぬが、ここに紹介される五曲の殆どが死に関連して解釈されるということには尋常ではない意味があるであろう。いま我々の問題と直接のかかわりをもつのはグノーの『ファウスト』であるが、この曲にはヴァーレンティーンという青年が登場する。彼は出征にあたって、自分の留守の間、かわいい妹を護らせたまえと神に祈り、戦地へ赴いて勇敢に戦おうとした、しかし、もし神が自分を天の高みへ召されるならば、自分はそこから妹を見守ってやろうと歌う。このことにカストルプは大きな感動を覚えた。蓋しカストルプはこの青年にヨアーヒムの面影を偲んだのである。この曲についての解説はこう結ばれている。

「このレコードについてはこれ以上言うことはない。我々がこのレコードについて簡単に述べておかねばならないと思ったのは、ハンス・カストルプがこのレコードを格別好んでいたからでもあるし、またこのレコードがもっと後の不思議な機会に、更にある役割を演ずるからでもある」(III, 903)。

ヨアーヒムの霊を呼び出す際に、この曲のレコードがかけられたのは偶然ではないのである。

さて魔の山を支配しはじめたデーモン、はじめは人々を大いなる鈍感におとし入れていたその魔力は、こんどは一転して救い難きいらだちへと駆

り立てる。

「不穏ないらだち。名状しがたい焦燥。毒々しい口論、怒りの爆発、いや、つかみあいの気配が一般的となった。猛烈な喧嘩、抑えのきかぬ怒号が連日個々人の間に、またグループの間に生じた」(III, 948)。こうして遂にはセテムブリーニとナフタ、作品を支えてきた二つのポールの如き役を演じたこの二人の決闘へと進むのである。まことに fragwürdig である。マンがオカルトの節に付した fragwürdig なる形容詞は、オカルト現象を述べるマンの態度そのものとして、言葉どおりに fragwürdig、問うに値するものではあるまいか。

3. イタリアの魔術師——「マーリオと魔術師」

『魔の山』以外の諸作品においても、シュレンク博士の面影を宿した人物は幾人も居り、又オカルト現象として解釈することによって真に納得のいく現象も随所にあるが、この小論においてその一々に言及することはできない。ただ『マーリオと魔術師』の一篇は、その扱っているテーマがオカルト現象そのものなのであるから、我々の上に述べた印象が正しいものであったか否かを、この作品によって検証する必要があるであろう。

この作品は、主人公一家が避暑旅行で滞在した海辺の町トレ・ディ・ヴェネーレで生じたある悲劇的事件の思い出として記されたもので、「ある悲劇的な旅の体験」という副題の示す通りである。事件というのは、僞僕男の魔術師チポッラが演技の相手として選んだ素朴な一青年マーリオによって射殺されるという意想外のものであるが、作品はその悲劇的結末に至るまでの経過を述べたもので、いりくんだ筋があるわけでもなく極めて単純な構成である。にも拘わらず、読者は最初の一行を読んだ時から、物語の進行に従ってその結末に導かれて行くこと、恰も張りめぐらされた綱の目が一点に手繰り寄せられるように感じるのである。それはかの『ヴェニスに死す』を読むのと同じ雰囲気である。

「トレ・ディ・ヴェネーレの思い出は雰囲気からいって不快なものである」(VIII, 658) という書き出しの一句が容易ならぬ成り行きを暗示している。しかもその恐るべき結末は後になって思うことではあるが、そうなることが既に予め分かっていたと言ってもよいのである。にも拘らず、子供までひきこんで、その恐ろしい結末を見るまでズルズルと引きこまれていったのである。かくてこの主人公一家は既に最初から、愉快ではないこ

の街の雰囲気の擒になっていたのである。

トレの町はテューレン海に面した有名な海水浴場ポルトクレメンテから十五キロばかりのところにある静かな保養地なのであるが、夏の観光シーズンともなればいろいろな人々が入りこんで俗化している。

主人公一家は初めグランドホテルに宿泊していたが、故あってベンジオーネ・エレオノーラへ移る。その女主人アンジョリエーリ夫人とは既に知り合いの仲であったから、万事好都合であった（この夫人の名は後にいま一度でる機会がある）。

ところがこの土地の暑さは格別である。主人公は暑さを厭うが、やがて夏も終わって気候が一変し、晴天にかわってシロッコ風が吹きそめ、海面に海月が漂うもの憂さ、それはこの土地のデーモンが投げかける陰影でもあろうか。

このような背景の上に、いよいよ魔術師チポッラは登場するのである。巨匠、芸人、力業師、手品師、奇術師というふれこみで現れたこのチポッラに対して、マンが詳細な描写を試みるのはいつものとおりである。

まず開幕までに随分と待たせる。出を遅らせて観客に気をもませるのは一種の戦術である。そのくせ息せき切って馳せ参じたというような印象を与えるのである。彼は僞僂男である。そのせいか却って傲慢に振る舞い、饒舌を弄して観客を擲揶する。しかし道化師的なユーモラスなところは全くない。道化師というものには、その態度、表情、身のこなしに、笑いを誘うおどけた感じがあるものだが、チポッラに限ってそんな要素は微塵もなかった。

かくてチポッラは算術手品から始めてトランプ遊び、透視術へと進んでゆく。この透視術はオカルト的なものをよく現しているのだから、その要領を述べておく。チポッラは舞台の裏に観客に背を向けて座っており、観客席では密かに観客同士でチポッラに何をやらせるのか取りきめがなされ、ある品物が観客の手から手へと渡ってゆく。チポッラはこの品物を捜し当てて、予め決められていることをやらねばならぬのである。かくてチポッラの暗中模索が始まる、彼はおのれの意のままに行動しているようでもあるが、何ものか目に見えないものの力によって導かれているようでもある。右往左往の末、漸く宝石を埋め込んだブローチが或るイギリス婦人の靴の中にあるのを捜し当てて取り出し、それを別の婦人のところへ持って行った。その婦人はアンジョリエーリ夫人であったが、予め定められていた口

上を、しかもフランス語で言上しながら夫人に差し出すのである。フランス語にはかなり難儀したけれども、とにかくチポッラはこれをやったのである。

これはまさにオカルト現象である。マンはチポッラをしてこの現象の特質を説明させている。チポッラの説明によれば、命令する意志と服従する意志とがチポッラにおいて一つになるということが重要である。これまでチポッラはおのが意志によって観客を自由に操ってきている。しかし今や彼は空中に漂う観客のものの言わぬ意志を実行に移す役割を果たす。他者に命令する能力の裏面は、他者に服従する能力である。命令と服従とは、合体して一個の原理、統一体をなしている。チポッラはこのような能力の持ち主なのである。チポッラの説明はこれ以上には及んでいないが、これはただ言葉どおりに解したのでは真意をつかみ得ないのではないか。ここで命令とか服従とかいうのは、普通の意味よりは深いのである。チポッラは観客を相手に選んで命令するときは必ずそれを実行させる。彼の不遜な態度に腹を立てた一青年に対し、君の舌を根元まで出して観客のご覧にいれたらどうかと命令すると、この反抗的な青年がいとも従順に観客に向かって、できるだけ長くその舌を出して見せたのである。そのとき彼は言う、「あれはわしがやったのだ」「いいな……あれはわしだったのだ」(VIII, 677)。つまり彼の意志が貫徹したのである。同様に、彼が服従の能力というときは、彼に命令する意志を完全に読みとって、その命令者の意志をおのが意志とするのである。いま観客たちが密かに取りきめたブローチ捜しを見事にやっつけたのはその実証である。してみるとチポッラが命令・服従の能力というのは一種の超能力である、すなわちオカルトである。

かくてアンジョリエーリ夫人にブローチを捧げた彼は、更に夫人の過去を語り、夫人がかつて世にも名高き女流芸術家、その名はエレオノーラ・ドゥーゼと親交を結んでいたことを言い当てたのである。満座、驚嘆のほかはなかった、夫人の過去は皆がよく承知していたからである。

実験は更に続く、それは催眠術に関するものであった。被実験者は次々に彼の思うがままになる。頑強に抵抗しようとしたローマの一青年も、結局は彼の思いのままに踊らされて観客の笑いを招く結果となる。最後に喫茶店「エスキジトー」のマーリオが選ばれた。この素朴な青年がチポッラの意のままに操られたことは言うまでもあるまい。すでに夢遊状態にあるマーリオはその恋人の名シルヴェストラを聞いて恍惚境に入る。ついにチ

ポッラの声色に惑わされて、この傭僕男をシルヴェストラと思い込んで接吻するのである。しかしチポッラの鞭の音に夢遊状態から醒めたマーリオは愕然として舞台から駆けおりて、さっと片腕をあげた。二発の低い爆発音。満場騒然。万事は終わった。主人公は子供達を連れて出口に向かった。「あれでおしまいなの?」「そうだ、あれがおしまいなんだよ」(VIII, 711)。マンは次の言葉でこの一篇を結んでいる。

「恐るべき結末、極めて宿命的な結末だった。しかしながらまた、救われたような結末だった。——私はあの時もそう感じずにはいられなかったし、いまもそうである」(VIII, 711)。

この結びが冒頭の一句と見事に照応していることは、読者の気づくところであろう。不愉快な雰囲気は遂に恐ろしい結末に至ったのである。ただ一つの救いは、子供達はこの結末を演技の結末と思いこんでいることであった。

チポッラの演技は、観客に対する嘲笑、揶揄に満ちている。Falsche Vorspiegelungen である。チポッラには読者が同情を寄せ、共感を覚えるべき何ものもない。主人公が言うように、あの恐ろしい結末に、何か救われたようなものを感じるのには、そのせいである。このような意味での merkwürdiger Mann によってオカルト的なものを演出させているからには、マンのオカルトに対する評価は決してポジティブとは言うことができない。

しかしそれならば何故に、主人公はこの不愉快な腹立たしい出来事に最後までつきあったのであろうか。トレの町の不愉快な雰囲気は逸早く感じながら、その上数々の面白くない出来事に遭遇しながら、だらしなくも子供まで連れてこの町に滞留したのは何故であるか。もちろんチポッラの演技を観ることを最初から目的としていたのではあるまい。だから、この滞留は不可解であったのである。しかし不可解とする etwas が主人公を最後のカタストローフェにまで引っ張ってきたのである。不可解とは理性の立場で言うことである。理性的には不可解な etwas が主人公に働きかけている。チポッラの相手に選ばれたものがチポッラに籠絡されたように、主人公はこの不可解な etwas に既に呪縛されていたのではないか。そこにまさにオカルト的なものが働いていたのではないか。チポッラはこれを形象化して見せただけのことではなかったのか。して見ると作者マンはオカルト的なものへのポジティブな評価は与えないまでも、その働きそのものはこ

れを認めざるを得なかったのではあるまいか。

ポジティブな評価を与えなかったということは、この一篇に漂う雰囲気から察知されることであるが、その内容はこの小論では言及することができなかつた。しかしチポッラの描写からだけでも、我々は作者の意向を推察することはできる。チポッラは徹頭徹尾、憎悪の対象として描かれている。本来ならば、この僂儂男に対して一片の同情があってもよく、その超能力に対しては驚嘆の念を表してもよい筈であるが、チポッラに対してだけは、そのような温情のかけらも感じられない。それはマンがオカルト的現象を認めながら、必ずしもそれに同調しないというイロニーの立場を保持しようとしていることを物語るものではあるまいか。⁶⁾かくてこの一篇は、我々が『魔の山』において得た印象のまちがったものでなかつたことの証拠を示してくれるものと言えよう。

〔注〕

トーマス・マンからの引用は *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. S. Fischer, Frankfurt/M. 1974 により巻数、頁数のみを本文中に示す。

- 1) マンのオカルト体験の紹介は種村季弘『詐欺師の楽園』（白水社、1985）「悪魔博士の正体」において要領よくなされている。
- 2) 新版心理学辞典（平凡社、1981）451頁、598-9頁による。
 なお、オカルト現象に関して項目別に詳しく説明してある有用なものとして『世界オカルト事典』（講談社、昭和63年）がある。
- 3) マンのオカルト論がショーペンハウアーの次の論文の影響下にあることは齊しく論者の指摘するところである*。 *Versuch über Geistersehn und was damit zusammenhängt.* (Zürcher Ausgabe Werke in zehn Bänden VII, Parerga und Paralipomena, Diogenes 1977)
 「何千年にも互って二つの党派が相対立して、一方が頑強に『そうである』と断言するのに対し、他方が執拗に『そんなことはあり得ない』と繰り返しているきわめて重要で興味深い問題に」ショーペンハウアーは、彼の意志の哲学の立場から解明の光をなげかけようとする（上掲書335頁）。
 * Dierks, M.: *Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann*. Thomas-Mann-Studien II. Francke Bern 1972, S. 133f. / Frizen, W.: *Zaubertrank der Metaphysik*. Lang Frankfurt/M. 1980 S. 278-288. / Balonier, H.: *Schriftsteller in der konservativen Tradition*. Lang Frankfurt/M. 1983, S. 207-216.
 なお、後に扱う『マリーオと魔術師』に関しては、むしろ *Über den Willen in der Natur* 中の *Animalischer Magnetismus und Magie* (Zürcher Ausgabe V) に依拠していることを G. Sautermeister が指摘している。Sautermeister: *Thomas Mann "Mario und der Zauberer"*, Fink München 1981, S. 29.
- 4) 書簡よりの引用は *Dichter über ihre Dichtungen Band 14 / II* S. 51-7 による。
- 5) 種村、前掲書210頁参照。
- 6) この一篇を以て、ムッソリーニやヒットラーのファシズムに対する諷刺と見ることは決して故なきことではないが、この小論においてはそのことに言及する余白はなかったのである。

Thomas Manns okkulte Erlebnisse

Satoru TANAKA

Im Winter 1922/23 nahm Thomas Mann bei dem Parapsychologen Dr. von Schrenck-Notzing dreimal an den Séancen mit dem Medium Willi in München teil. Über die Sitzungen berichtet er im Essay "Okkulte Erlebnisse" und in den Briefen, die er in den nächsten Tagen an Schrenck-Notzing schrieb. Er sah bei den Séancen sogenannte Materialisationsphänomene, telekinetische Erscheinungen: ein Taschentuch steigt selbsttätig, oder vielmehr von einer in seinen Falten verborgenen klauenartigen Stütze geführt, vom Boden auf; eine Glocke wird genommen, geläutet, in der Luft gehalten und danach unter einen Stuhl geworfen; ein Papierkorb erhebt sich; eine Schreibmaschine setzt sich in Bewegung, obwohl niemand sie bedient. Für diese Phänomene gibt es keine rationale, physikalische Erklärung. Nach Thomas Mann war jede Möglichkeit mechanischen Betrug oder taschenspielerischer Illusionierung ausgeschlossen. Er gesteht, daß er den Okkultisten in die Hände gefallen sei. Glaubte er wirklich alles, was er bei den Experimenten sah? Das ist eine heikle Frage: kurz gesagt, er glaubt weder, noch glaubt er nicht. Er nimmt vielmehr eine ironische Stellung den okkulten Phänomenen gegenüber ein. Thomas Mann unterscheidet den Okkultismus vom Spiritismus: jener sei die Erforschung der Natur, die empirisch-experimentelle Metaphysik, während dieser der Glaube an Geister und Gespenster, der Köhlerglaube sei. Er zweifelt die Realität der Phänomene nicht an, ist aber anders als die Spiritisten nicht darauf versessen. Es handelt sich bei ihm darum, wie er diese Erlebnisse literarisch gestalten soll, damit er sich vom Bann des Okkulten befreien kann.

Im Abschnitt 'Fragwürdigstes' im "Zauberberg" stellt Thomas Mann die spiritistischen Sitzungen dar, die Krokowski mit dem Medium Elly

durchführt und an deren Ende der tote Joachim heraufbeschworen wird. Er beschreibt die Experimente sehr ausführlich und zeigt starkes Interesse dafür, aber gleichzeitig bezeichnet er sie als abgeschmackt, unanständig und hält davon Abstand. Hier kann man seinen ironischen Stil erkennen.

“Mario und der Zauberer” behandelt das Okkulte als Hauptthema. Auch in dieser Novelle zeigt Thomas Mann keine Sympathie für den Zauberkünstler Cipolla, obwohl er übernatürliche, bewundernswerte Fähigkeiten hat. Daran ist abzulesen, daß Thomas Mann nicht umhinkann, die Realität und Echtheit des Okkulten anzuerkennen, es aber nicht als positiv bewerten möchte.